

『新・やまと物語』

改訂版

■日本書紀や古事記は、

『天照大神の^{ち すじ}血筋を引く子孫のみが、天皇になれるのであって、他の者は、何人も、天皇にとって代わることは出来ないのだ』と述べ、【万世一系の理想の系譜】を掲げている、と言えましょう。

■とはいえ、記紀を^{にゆうねん}入念に読むと、何度も、＜東西の二朝時代＞が^{しゅつげん}出現したように思われます

・ つまり、記紀は、＜二朝時代＞があったということを^{かく}隠し、【万世一系の理想の系譜】に、^{か か}書き替えているようです。

■あえて言えば、中国で^{いくど}幾度となく^{く かえ}繰り返されている「^{ぜんじょう}禪讓」が、我が国へ^{とうらい}到来しないように願って、【万世一系の理想の系譜】が^{けい ふ}創作されたものと思われま

・ その^{ぜつだい}絶大な^{こう か}効果は、今までの日本の歴史が、^{にょじつ}如実に物語っています。

・ 日本に、【^{ぜんじょう}禪讓】が入り込むことは、決してありませんでした。

■世界中を^{み わた}見渡してみても、他に^{ほか れい}例をみない【こころみ】だといえましょう。

『新・やまと物語』第1巻・第2巻を読まなくても、第3巻等々、どこからでも^{えつらん}御閲覧ください。きっと、ご理解いただけたと思います。

第3巻等を読んで、興味を持っていただけましたら、第1巻・第2巻を御拝読ください。

(1)本屋で、第1巻・第2巻を販売しています。

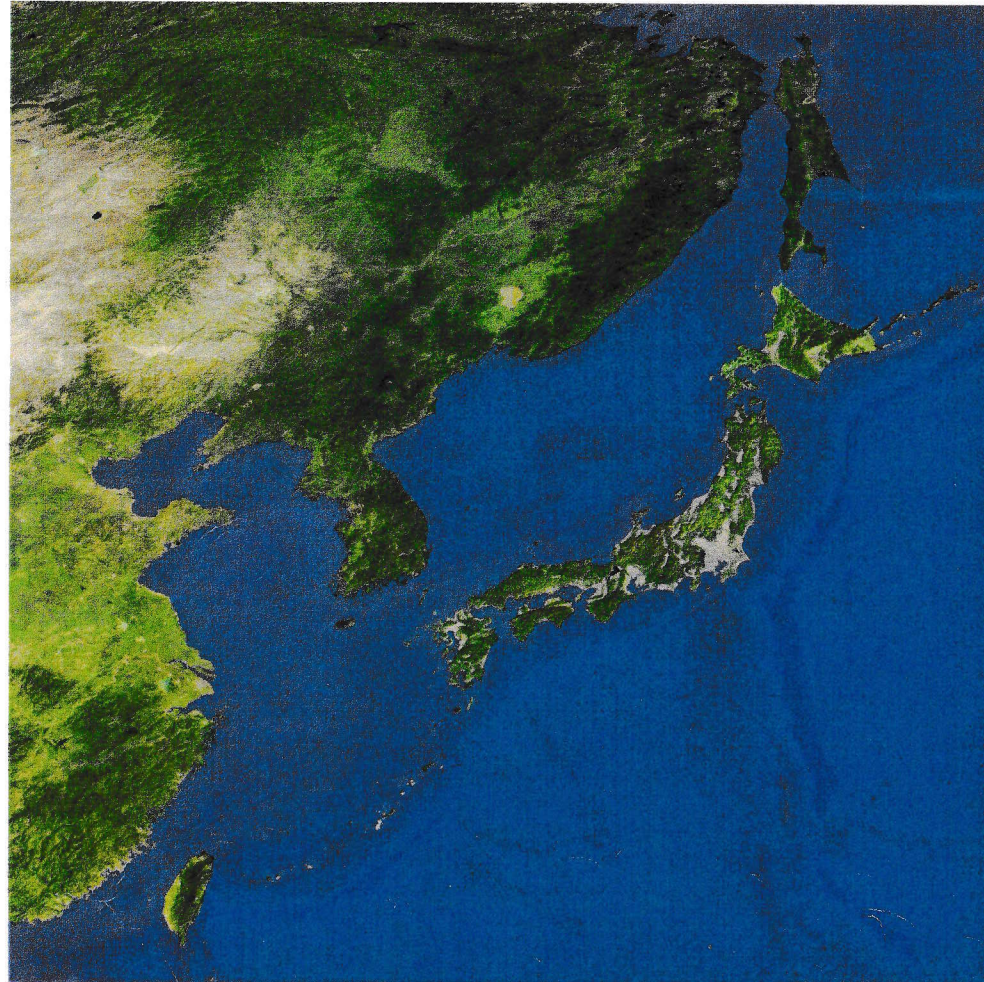
(2)〔各地域の〕中央図書館【レファレンスコーナー】に電話し、近くの図書館へ転送してもらおうと便利です。

注記

・ 画面上部の『回転マーク』を押すと、画面全体が 時計回り方向に 90° ずつ、回転します。適正な状態で お読み下さい。

新・やまと物語 (3)

こ が けい さく
古閑炯作



画像提供：東海大学情報技術センター

(第3巻) (1) - 2/2

『新・やまと物語』^{第3巻}から転写して下さい。
* 海の色が濃すぎる。少し薄くして下さい

3巻



画像提供：東海大学情報技術センター

『新・^(第一巻)やまもと物語』から転写して下さい。

* 海の色が濃すぎる。少し薄くして下さい。

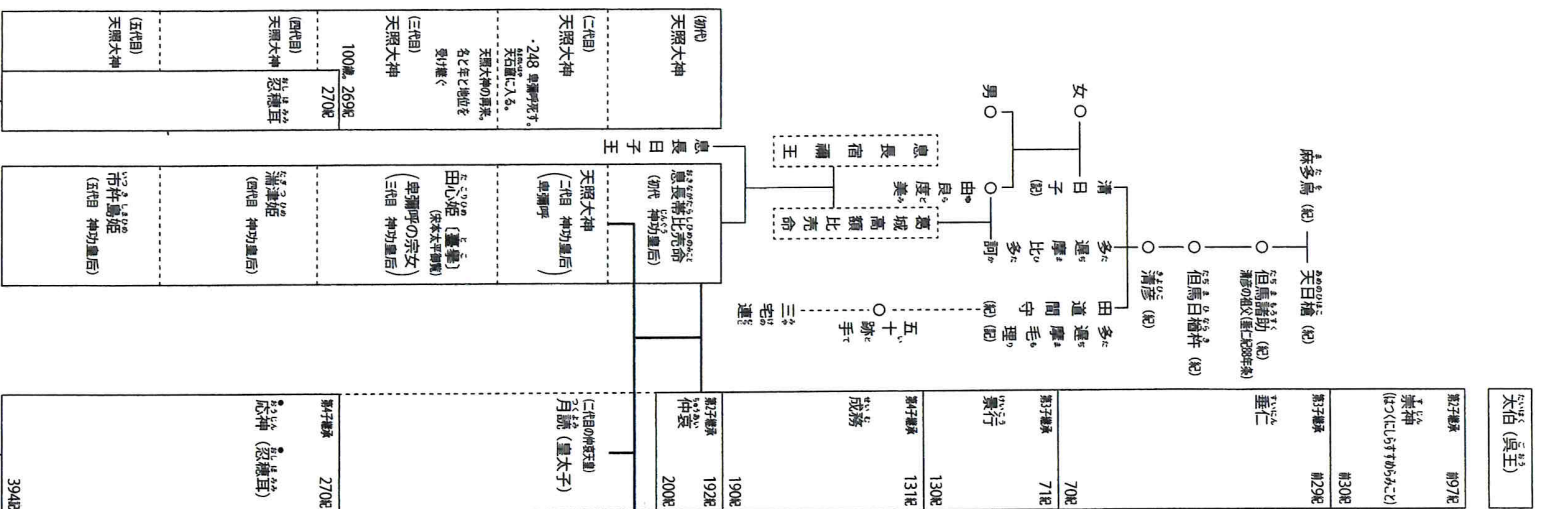


(拡大映像)

系譜 [第1表]

万世一系の
↓
思想によつて
作られた系譜
(記・紀の系譜)

譜系に於ける言語の位置



建武中興の御成敗をせりぞけたので、これより以後、天皇御等の命が短くなつた（記）
 まづ、長男（氏女）が襲名している限り、同一名を名乗るという古来の風習は、建武中興（に
 徳天皇）の時に廃止され、これに替わつて、大陸の王位継承法が採用されることになつたので
 あるのか。

これより後、王位は、複雑に継承されてゆくことになる。

A3E 印刷

・ 殷末 いんまつ 周の太伯は、弟季歴に位を譲る為、江南に

〔倭人は自ら太伯の後と云う〕と、魏略逸文・
晋書・梁書に記されている。

- ・(?) 前漢の武帝（在位前141～前87年）、閼越王を滅ぼす。（史記・漢書）

* 閼越王は、実は、太伯の末裔だったので
なからうか。
閼越王 かんえつおう 太伯の終 おのち 閼越王 かんえつおう 遺を い あきらめ、
会稽の事 かいけい こと

・前97 箕子^{ヒコ}達の百余国^{ヒコノクニ}(後代の倭国)中の極楽神天皇^{ヒコノカミ}即位。

倭国（北九州・山口地方）の極南界に位置していたのであろう。（後漢書倭伝）

- ・(垂仁28) 垂仁天皇の同母弟「倭彦」が薨じた時、殉死が始まった。(祭神記・垂仁元)

- ・ 57 極南界の倭奴国が奉貢朝賀した。(後漢書倭伝)

- 61 田道間守を常世国（先の國越のこゝにあらう）
か）へ遣わす。

・ 71 桶けづを持ち帰った田道間守たにまもり、殉死しゅんしする。(記・紀)

・ 107 倭国王帥ミコ升ノボリは、生口百六十人を献けんじじ、請見きんけんを願ねがった。(後漢書倭伝)

・ 147
桓・靈の間、倭国大乱。(後漢書倭伝)
〔倭国と箕子国との戦いであつたらうか〕

三十余国を置いて統治することとなったように思われる。

- ・(?) 南の奴国のことを「邪馬台国」(八女土国)と呼称するようになったか。
- ・(?) 井立(国造が東遷版をたてて国を治めた)

朝献。(魏志倭人伝)

不和。(魏志倭人伝)
 卑彌呼死す。男王(素戔鳴)立つ。
 ・(248?)

- ・ (?) 平彌時の示文(寛平(田心院)元年)を王となす。
- ・ (?) 素戔鳴、出雲国(今の近畿地方)へ下る。

素戔鳴は、中国山脈の山奥伝いに下っくだていっ

- 266 神功皇后、晋の武帝(317)二年に貢獻。(紀)
- 313 晋の力が弱まった。高句麗^{コウリ}は楽浪郡^{ラクラン}(平壤^{ピョヤン}あ

・ 314 高句麗は、引き続いて帯方郡を亡ぼす。

を属国としたのであらう。

*この当時、馬韓から百濟へ、辰韓から新羅へ

- 331(辛卯) 優は辛卯の年に来て海を渡り百残(百濟)・

・(372?) 百済、七枝刀ヒツサヤノを倭国に献上。(干支2)運繰り下りサ (広開土王陵碑・神功皇后の三韓征討)

・ (?) 天叢雲剣を献上。阿蘇の火を三輪山に移す。

・ (?) 出雲国(近畿地方)の国譲り。

• 391 広閑土王即位。

討ち、多くの城を落す。(広間土王陵碑)

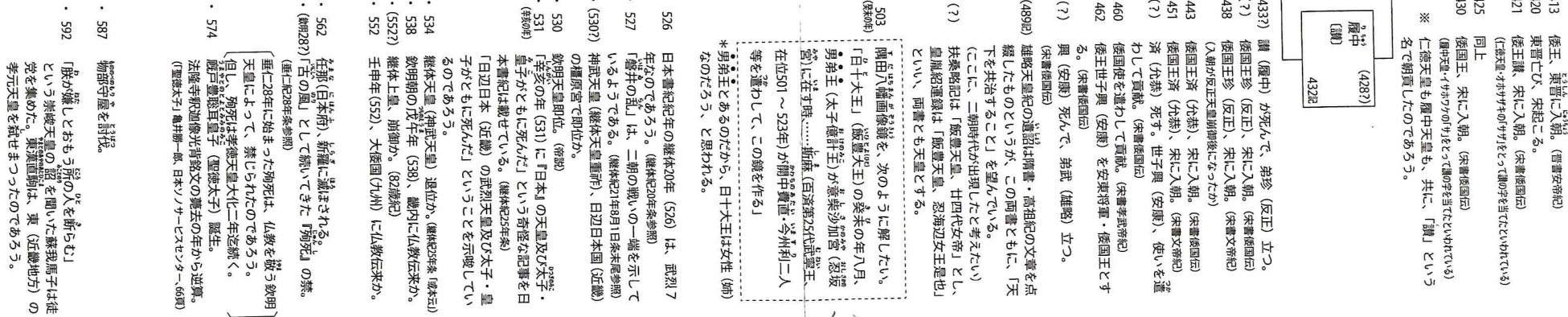
〔広神王皇の崩御の機をつかんで、高句麗は百

- 400 高句麗が倭軍を任那加羅まで追撃。(広開土王陵碑)

戦ったが、大敗。(広間土王陵跡)

『新事物語』
筆老第表
から転写して
下さい。
決して新しく
作らないで
下さい。
4ページが変
だからです。

必ず、切斷の爲の線を入力して下さい。



第2表 前300年ころを中心とする朝鮮半島の歴史と日本の歴史との対比 (想像)



※次第に、明るい土器へと変わってゆく。

からこ いけがみ子ね ふよ いんみん

※唐古・池上曾根等には、扶余系殷民が住んでいたと思われる。

からこ みき

※唐古・鍵造所から黒っぽい弥生式土器が出土する。

〔注〕●印は、「扶余系殷民の子孫達の遺物・遺構」と解釈してみたい。

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

・右頁に掲載下さい。

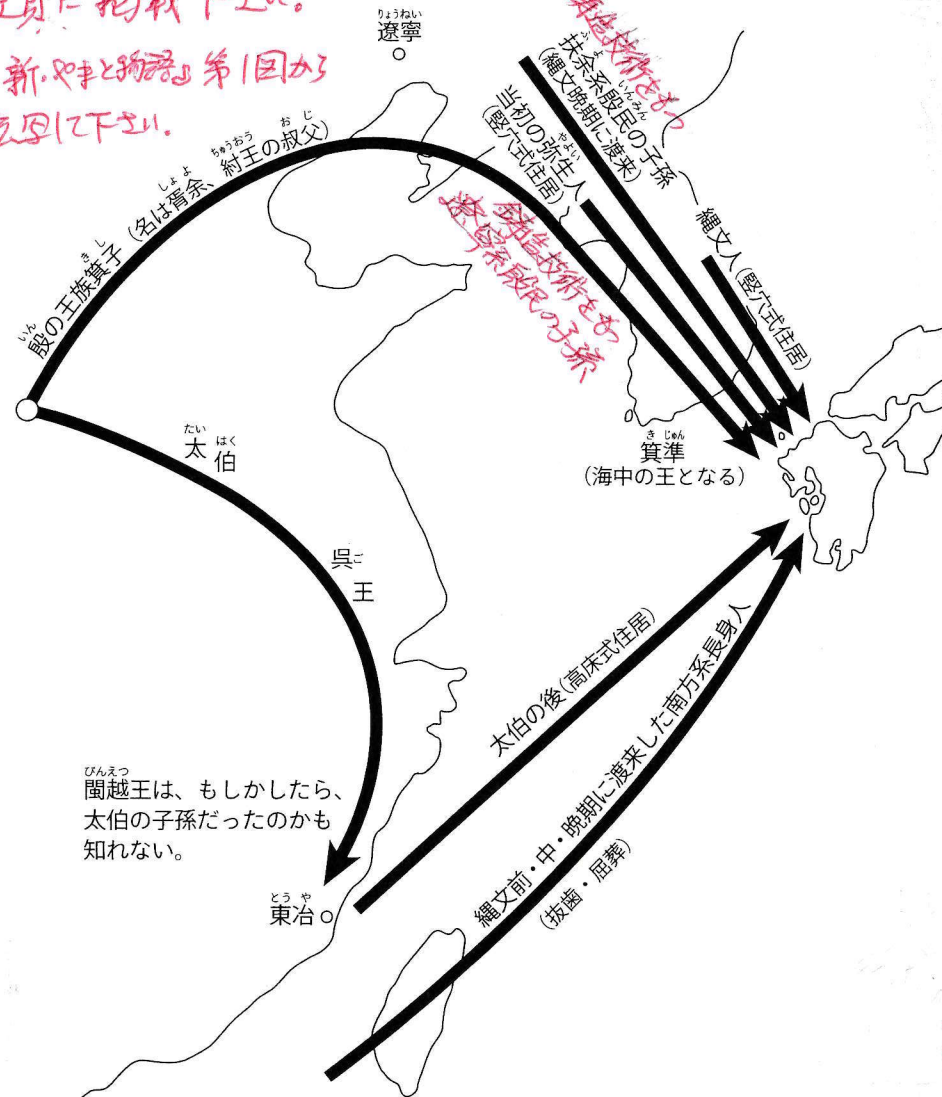
・日新・文化財の表が転写して下さい。

時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代		前300		当初の弥生人渡来		
	前期	前200	- 前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 - 前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。(「三国志」韓伝)	【箕子達による】 百余国の時代		
		前100	- 前104頃、倭人東遷開始か。 - 前97、崇神天皇即位(紀)	(イ)、(ロ)の位置を 同じにして下さい。		
	中期	B.C. A.D.		(破線) 赤い点線を引きとせ		
		(イ)	57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。	↓ (ロ)		
古墳時代		-100	107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。	近畿地方の高度な文化は、弥生時代末に突然表出する。その後、高度な文化が急激に広がる。		
	後期	-200	147 } 倭国大乱 188 }	黒字 かみかひのふい と表裏表裏 (小銅鐸廃絶)		
		-300	239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。	【倭人による】 30余国の時代		
		-400	(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合)	【男王卑弓彌呼素】 男王素(素戔嗚)を追放。 素、母の根拠を建国。 (近畿に古墳出現)		
				【男王卑弓彌呼素】 →【男王卑弓彌呼素】		

・つまり、近畿地方の高度な文化と、次の古墳時代とが、スナリとはつながらない。

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
(「吉野ヶ里」安本美典、毎日新聞社、156～7頁参照)

- ・左頁に掲載下す。
- ・『新・家事と物産』第1回が転写して下さい。



第1図 六つばかりの種族 (想像図)

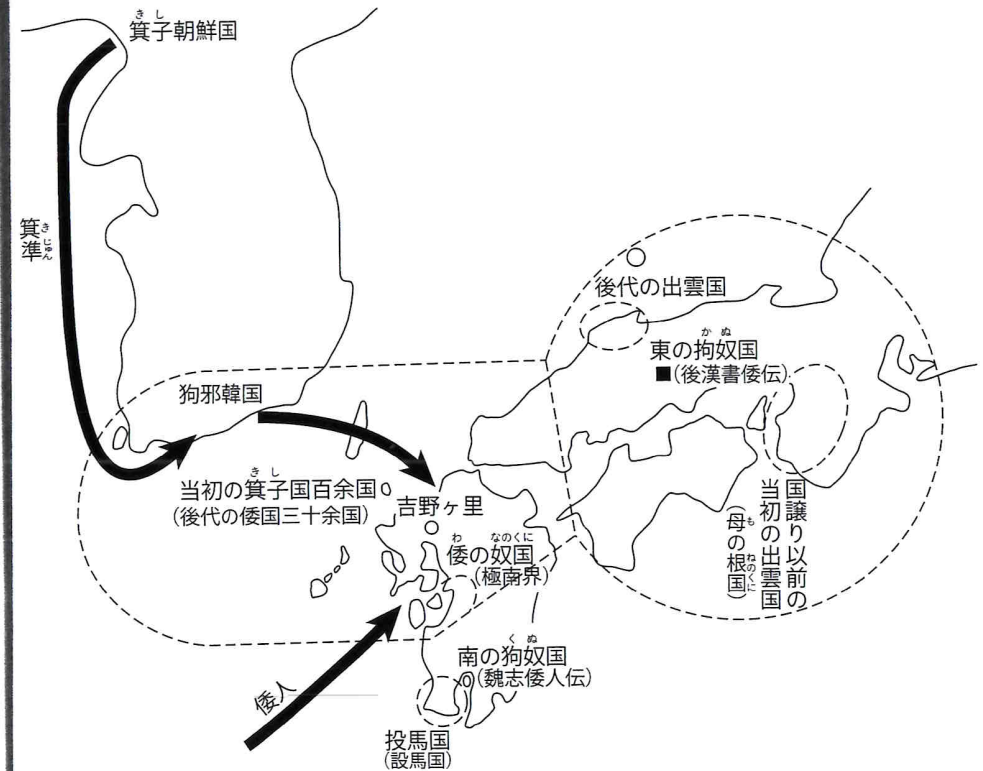
第3表 弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出 来 事	統 治 者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期			縄 文 人		
弥生時代	前期	前300		当初の弥生人渡来		
	前期	前200	- 前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 - 前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。 (「三国志」韓伝)	【箕子達による 百余国の時代】		
		前100	- 前104頃、倭人東遷開始か。 - 前97、崇神天皇即位 (紀)	倭奴国 (極南界)		
	中期	B.C. A.D.	57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。			
古墳時代	後期	147 188	倭国大乱	(小銅鐸廃絶)		
		239 248(?)	- 卑彌呼、魏国へ朝貢。 248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。	【倭人による 30余国の時代】		
		-300	(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合)	男王素(素戔鳴)を追放。 素、母の根国を建国。 (近畿に古墳出現) 当初の出雲国 「母国」(ものくに) (倭人による統一) (銅鐸廃絶) 出雲国の国譲り [現在の出雲国へ国替え] (銅鐸廃絶)		
		-400				

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平^{たかしまちゅうへい}氏の見解を基にしている。
 (「吉野ヶ里」安本美典、毎日新聞社、156～17頁参照)

・右頁に掲載下さい。

・『新・やまと物語』第2図から転写して下さい。



第2図 東西二つの文化圏の対立 (想像図)

左負金通仁

限一

17 大生
下栽。

* 倭国使の来と
見較ハ易ク
おきたハ、

1,789^P - 3/7

田二丈五

イロハニホフヘ
カキコノセ

(444頁の代り)"
と類似 (17.13)

A photograph of a yellow, carved wooden object, possibly a handle or a small sculpture. The object has a bulbous, rounded body with two small, dark, oval-shaped holes. The base is flared and features several horizontal ridges or ribs. The wood has a visible grain and some minor staining or wear. The object is set against a dark, textured background.

(11)

④ 695⁹-13/28 金環 24

花

1405

1304

292 恩惠園

五
基手立人

145

25/10

(般後期 高 ± 10.3 cm)

(*)「葉」は「面」を組む合字。胸元(↑)上ずるが、

『中国美术全集』

王器

序

邵書院

19

96年12

2月20

日新

4387
TV 6181513

229
4.2

頁卷既

...

はた

—

13. 女
・ 父^{ちち}の部のある冠^{かん}と被^ひり、月^{つき}に田^でをま^まつて、両手^{りょうて}を組^{くみ}み合わせ、下腹部^{げふぶ}の腰^{こし}から(第291・292回のおな)に幅^{あみ}の本^{ほん}を垂^たらしていたのだらうか。

卷五のあらまし

・カラー

・右頁全面に

限定一杯 掲載し
掲載下さい。

・出来るだけ

鮮明にお願ひします。

・重要です。

1,789⁰-4/7

・梁(502-557)の時

絵だから、

著作権許諾は不要だ
と思います。



(12)

1404

1304

第291回 倭国使

梁職貢図と東部ユーラシア世界

鈴木清民

勉誠出版

2014年5月10日発行

口絵参照

下腹部に数条の帯を巻

き

広幅の布を

巻

き

き

き

き

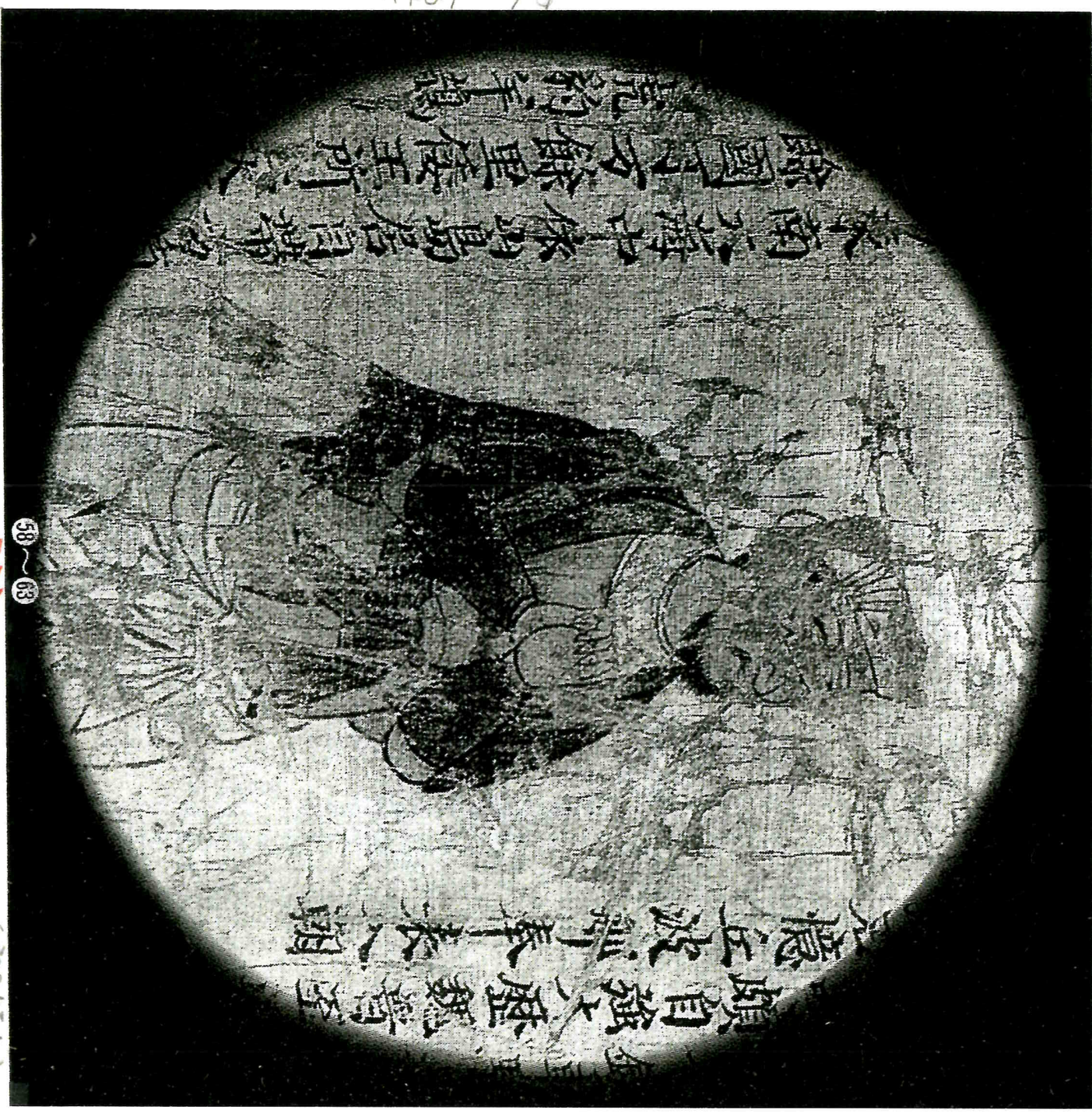
き

き

上下に動いている手が一番高い状態の時を描いたのかも知れない。下着まりのズボンを穿いている。

・左頁全面に、はみ
掲載下さい。

(13)



1.789P-5/7

58~63

1409 第292図 倭国使 (※梁当時の倭国の貴人を描いたわけはあきらか) (部分拡大)

1309

『最新和馬合図論』 甦る女王国と吉野里遺跡 学習研究社 1989年9月旧発行

・梁(502~557)以前の時代、倭人に随伴して中国の都へ至った扶余系殷民の子孫を

絵師が「倭人」として描いたのだらうか。(※職貢図の起源を漢代に求める説がある)

・写真図版292<玉掛子人>および写真図版393<人面付上略>と似ているように思われる。夏の間、上を眺めた可能性もある。

2009.7.4

自他共々

・カ-
・右肩上げ
に面配。
・腰及一杯
はみ出し
大々掘削
F211

1790^P-2/4
1711
車庫の
袋に7011

1810^P-2/6 219

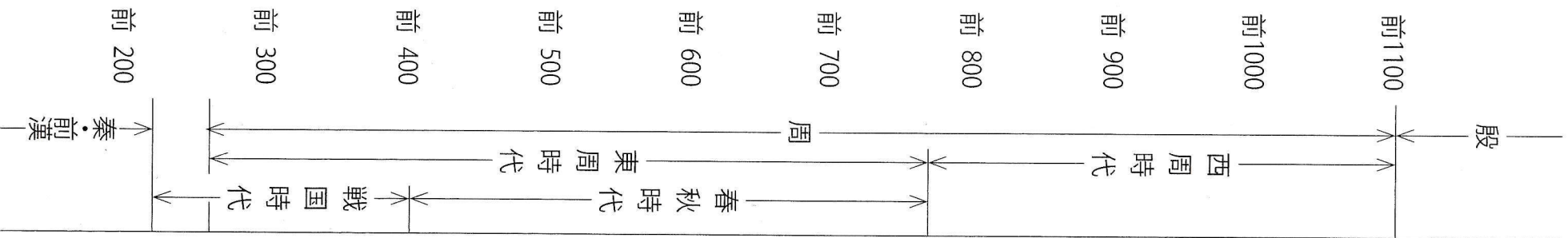


(第3巻) (14) 主(第3巻)14ではない。

1406
写真版 293 人面付き土器
大阪府堺市目黒土器出土
全長約 10cm。顔面部の長さ約 4cm。

1306
『朝田新聞』平成10年7月4日付<最古級の人面土器> 茨木の遺跡で出土の参照
口の下のふくらみは「顎頰」を表現しているのだらうか。(写真版 292 第292図参照)
「顎頰」の穴が見える
「顎頰」は、髪をたはねているように見える」という。
1892 3/4 1789 5/4
松根千直 徳島県

第4表 周の時代区分



- 前1100年頃 周の武王、殷の紂王を滅ぼし、鎬京に都を置く。
- // 第2代成王 郊廓に都を置く。しかし又、鎬京へ都を遷す。
(春秋左氏伝、宣公3年条参照)
- ※ 郊廓は、洛陽西方の瀕水の東にのこる巨大遺跡のことであろう。
- ※ 成王の時、周公旦は現在の洛陽の地に『洛邑城』『成周城』を築いた。
- ※ 鎬京が首都とされ、洛邑・成周は副都とされた。

- 前770年 第13代平王、鎬京を秦に与え、郊廓へ都を遷す。
(春秋左氏伝、昭公26年10月条。他参照)

※ 洛陽西方の瀕水の東の巨大遺跡を調査した結果、

- ① 殷代の層
- ② 西周時代の層
- ③ 東周時代の大量の遺物を包含する層
- ④ 戦国時代における補修部分

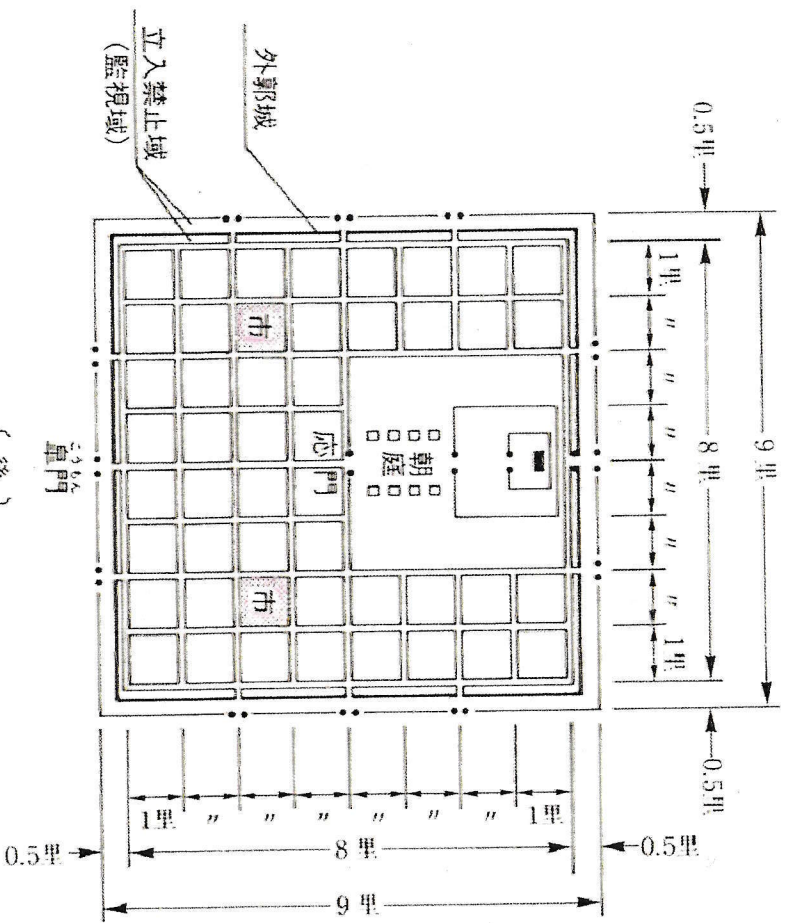
が確認されたという。〔中国の帝都〕村田治郎、綜芸社、18～20頁参照

- 前516年 第26代敬王4年、成周へ都を遷す。(春秋左氏伝、昭公26年条参照)
- 前510年 敬王10年、成周の城壁を修復。(春秋左氏伝、昭公32年条参照)
- 前509年 敬王11年、前年に引き続きいて、天子の居城である洛邑城(宮城)を成周城内へ拡張する工事も行なったのであろう。(春秋左氏伝、定公元年条参照)
- 前403年 (前453年) 戦国時代始まる。

- 前256年 第37代赧王、成周から元の郊廓の王城へ遷って西方の秦と戦い、ついに滅ぼされたと解される。(史記、周本紀参照)
- 前221年 秦の天下統一。
- 前206年 秦滅亡。
- 前202年 前漢興る。

〔注〕『史記』の著者司馬遷が「郊廓の王城」と「洛邑・成周の王城」を混同したから、現在混乱状態にあるのだから、と推察される。

(前)



(後)

(8・8城)

第5図 「詩経」周礼の理想都市(周の首都『鎬京』の想像図)

(※市があり、東西南北の各面に3門づつ、合計12の城門がある。)

[注1] ①『詩経』に、「城内の中央に王宮を建て、その東と西に民の住居を連ねさせ、宮室の正門には応門を立て、都城を囲む城壁には皐門を立てた」などである。

②『周礼』に、「匠人営国。方九里旁三门。国中九经九纬。经涂九軌。左祖右社面朝后市。市朝一夫」とある。

[注2] 〇正方形の九里四方の都城の各面にそれぞれ3門、合計12門があり、対面する門をつなぐ大道が縦横に配されていたのである。

〇また、外敵が城壁を乗り越えて侵入しようとする危急の時、守備兵達がただちに駆けつけることができるように、戦略上、外郭城城壁の内側に沿って一周する大道が設けられていたことだろう。(第27図参照)

〇さらに、上記の各大道間にそれぞれ1本づつの大道が配置され、全体では、東西方向に9本、南北方向に9本の大道があって、整然とした街並みが形成されていたように解される。

〇周の首都『鎬京』は、いわゆる「前朝后市・左祖右社・中央宮闕・左右民廛(すまい)の原則」と称される構想の理想都市とされたのではなからうか。

[注3] 〇第27図「唐の長安城」との類似点が多い。

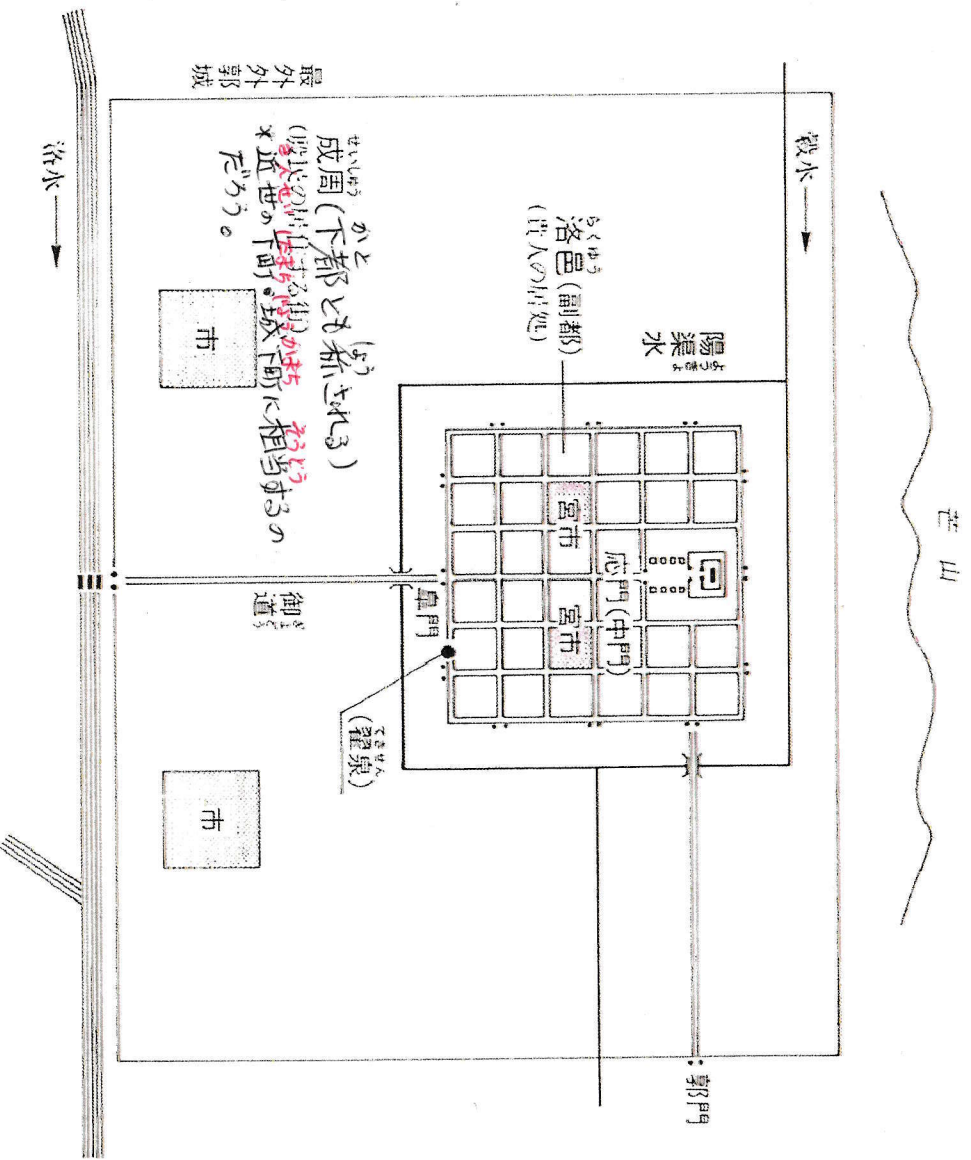
※ 相廟での八佾の舞

〇八佾は八列の意。八佾の舞は、八列八行、64人の方形の群舞で、

これを行なうのは天子の特権とされていた。中国(周の時代)の習俗。

〇日本でも、天皇の特権とされた。(皇極紀元年条。持統紀6年正月条)

第4巻 218頁 →



第6図 周公旦が築いた副都『洛邑』『成周』の想像図

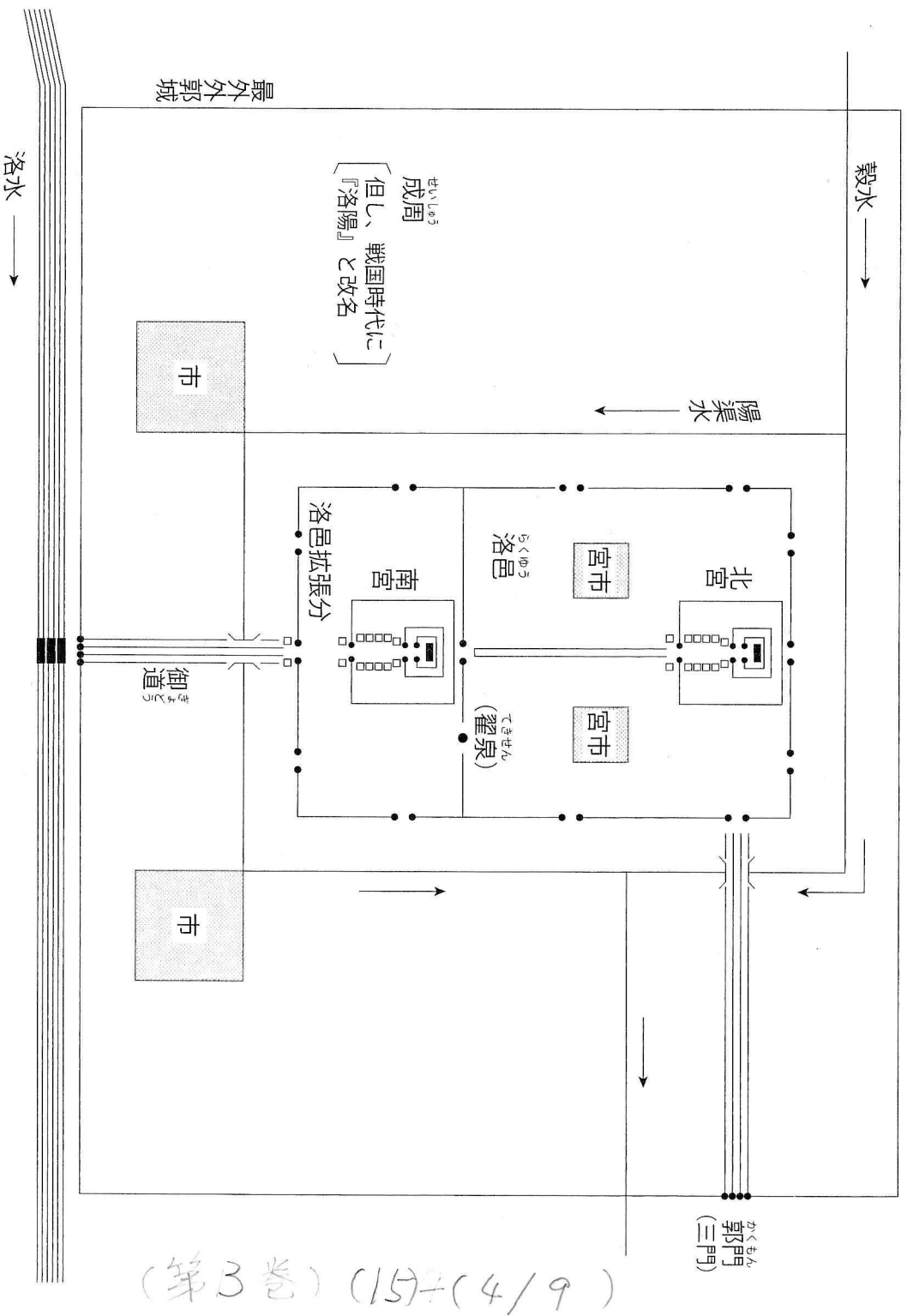
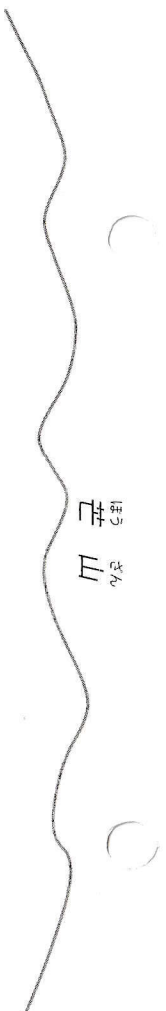
〔注〕①現在、「周公旦は、『洛邑』と『成周』の2座を別々にほぼ近接させて配置した」と解されている。しかし「支配者と被支配者とは平等である」といわんばかりの配置にした筈はあるまい、と思われる。

「支配者達の居処である『洛邑城』を周り成す『成周城』を築いて、この『成周城』内に、被支配者である殷民達を住ませたのだろう」と考えてみたい。

②周礼に「閭者（門番・宦官）は、『中門』（皇居の外から内に順に設けられた五門のうち真中の第三門）を警備し、云々」とある。（『漢・魏・六朝・唐・宋散文選』平凡社、197頁参照）

③昔、宮中に設けた市場を『宮市』と称した、という。（『漢和辞典』小林信明、小学館〈宮市〉参照）

※ 六佾の舞、他
○ 諸侯は六佾、六列六行、36人。大夫は四列四行、16人。士は二列二行、4人を周の制とした。

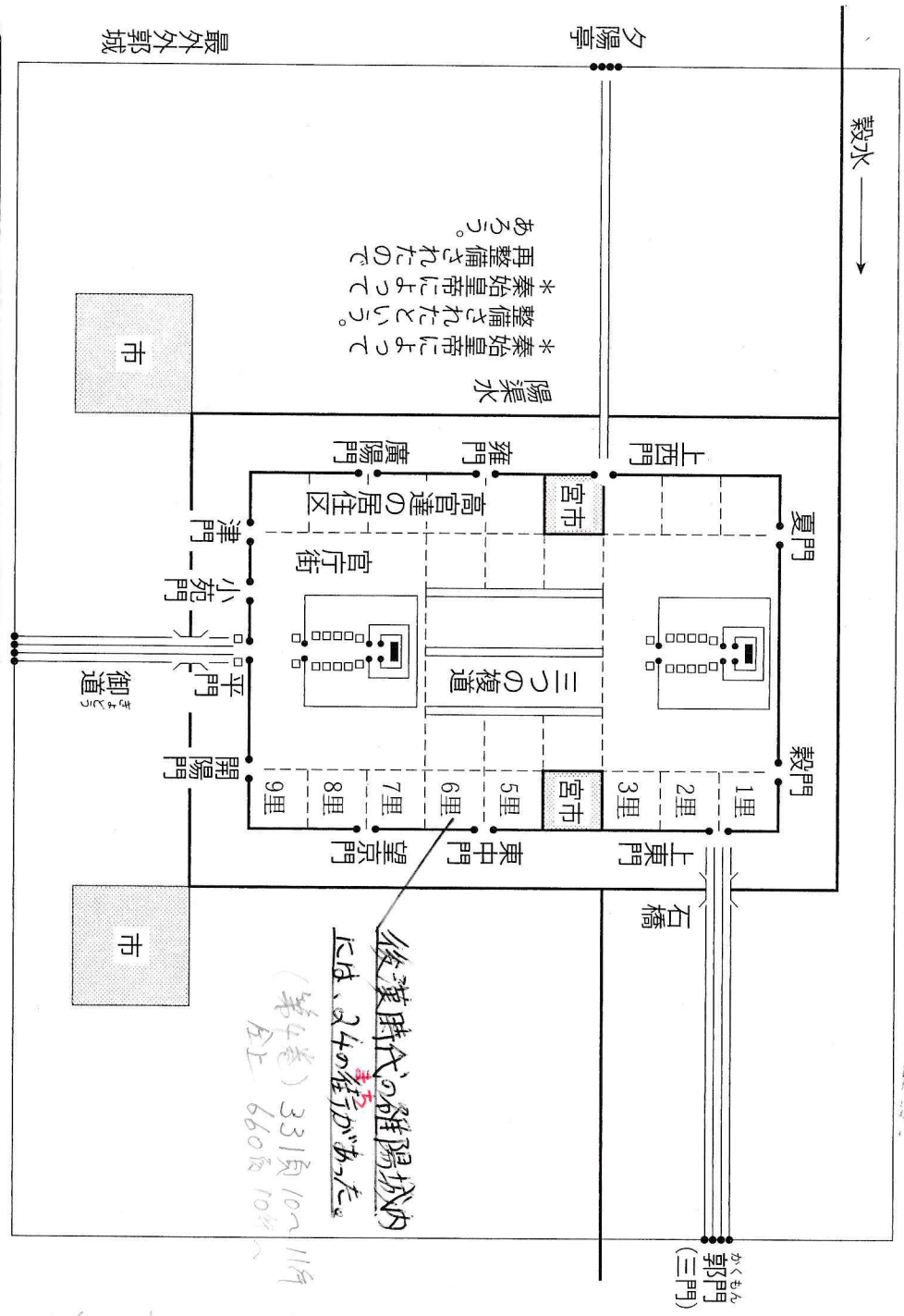
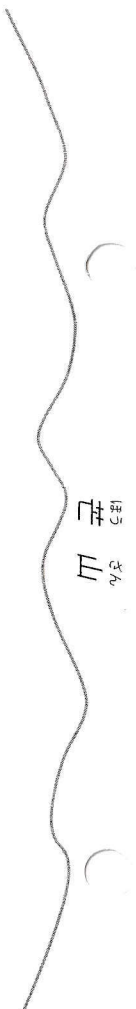


(第3巻) (15) + (4/9)

〔9・6城〕

第7図 周代末ころの洛陽城想像図

〔注〕九重^{ここのえ}の都：昔、中国の王城は、門を九重に造る例であったという。（「広辞苑」〈九重^{ここのえ}〉参照）



最外郭城

* 秦始皇帝によって整備されたという。
* 秦始皇帝によって再整備されたのであろう。

陽渠水

夕陽亭

穀水 →

上西門

夏門

穀門

上東門

石橋

郭門 (三門)

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

宮市

市

市

市

市

市

市

市

市

市

市

市

市

市

市

市

市

市

市

洛水 →

円丘

0 1 2 3 4 5 6 里

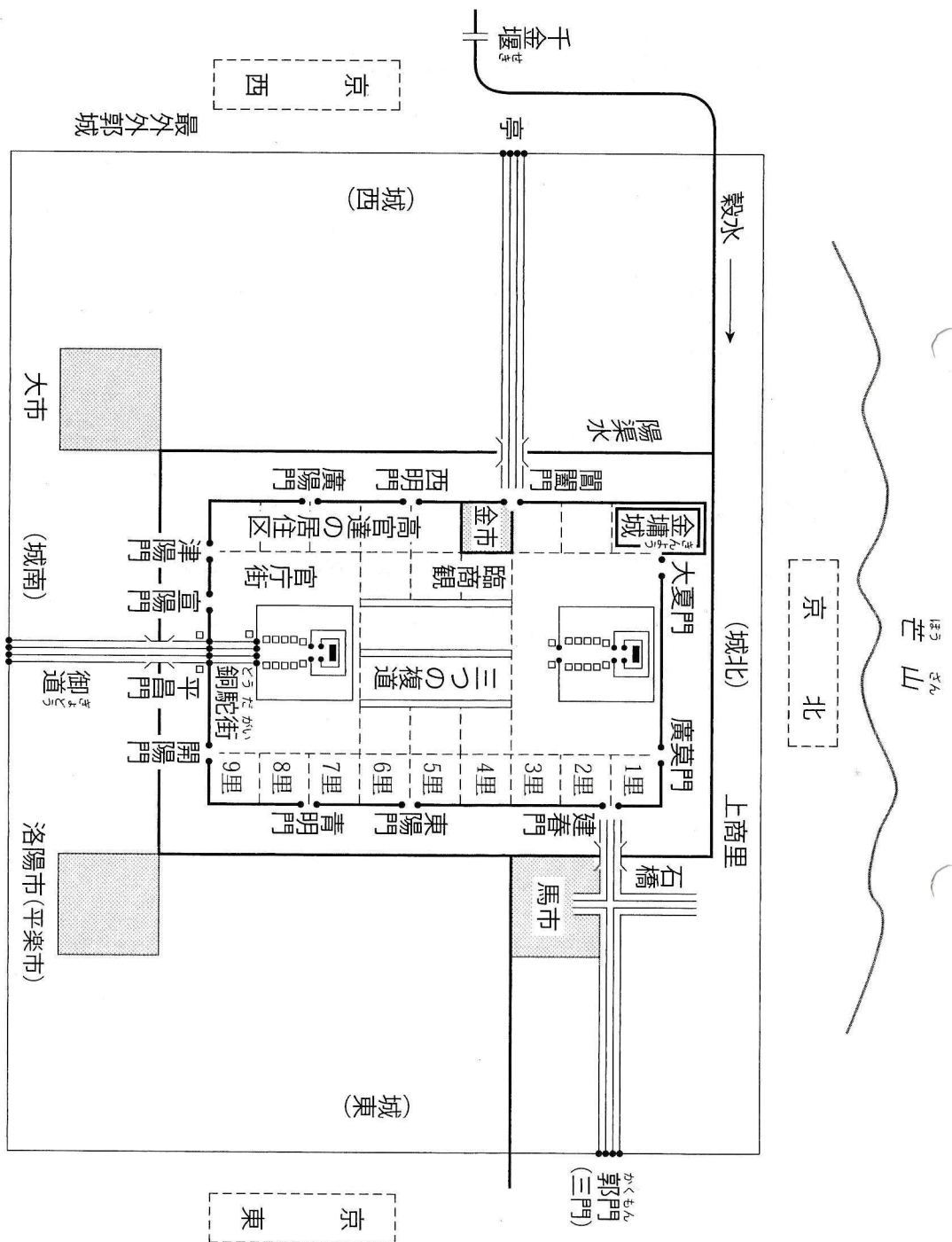
伊水 →

嵩山

〔9.6城〕

第8図 後漢雒陽城想像図

- [注] ① 「平門」が正門であった。
② 「小苑門」(苑門ともいう)は、墓壇の無い少々小さな門とされ、馬車の通用門として用いられたのではなからうか。



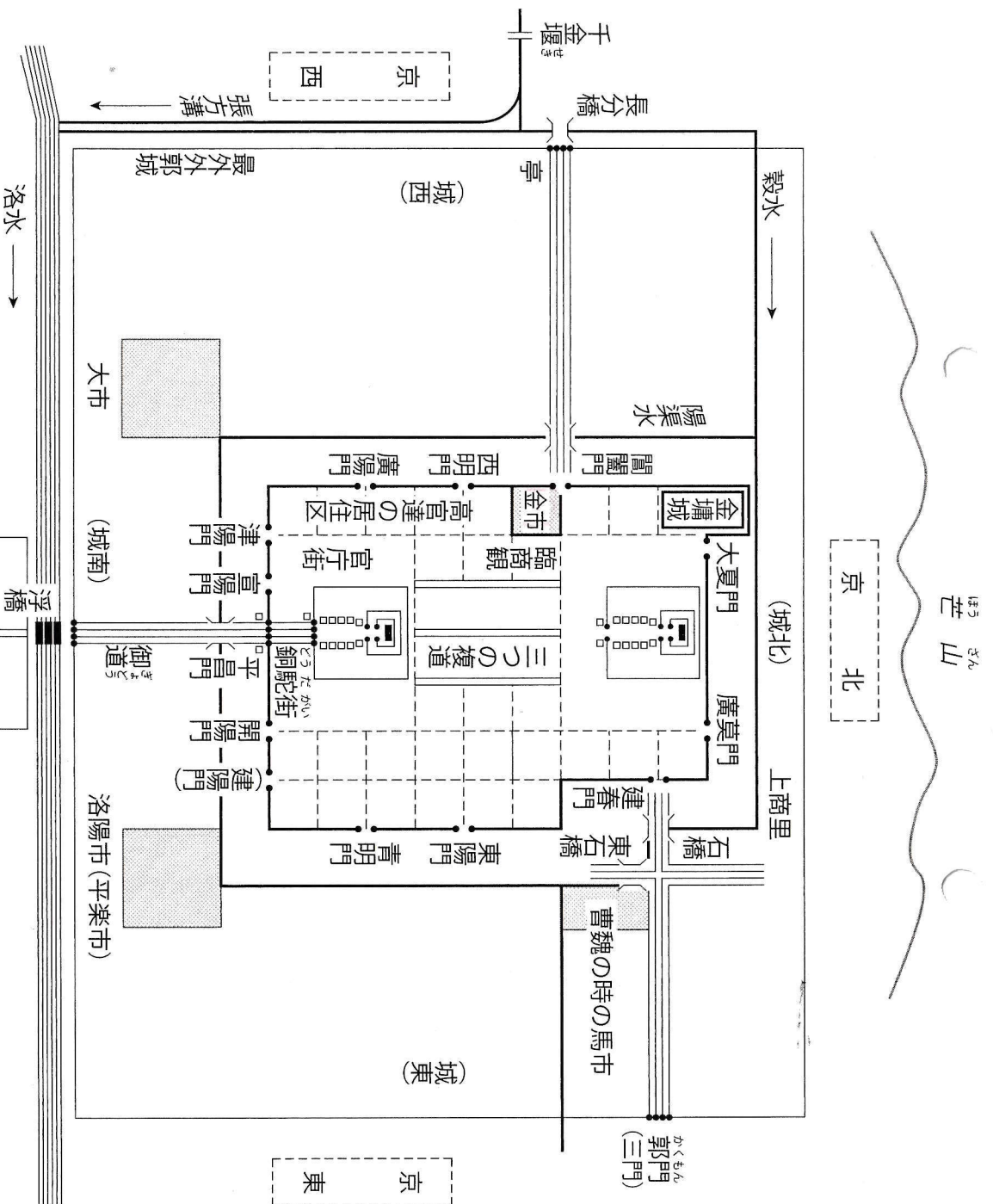
(第3卷) (15) (6/9)

・「太極殿」「宮城」は門を設けていた
曹魏洛陽城が、我が国の都城の
祖型なのでないだろうか。

第9図 曹魏洛陽城想像図

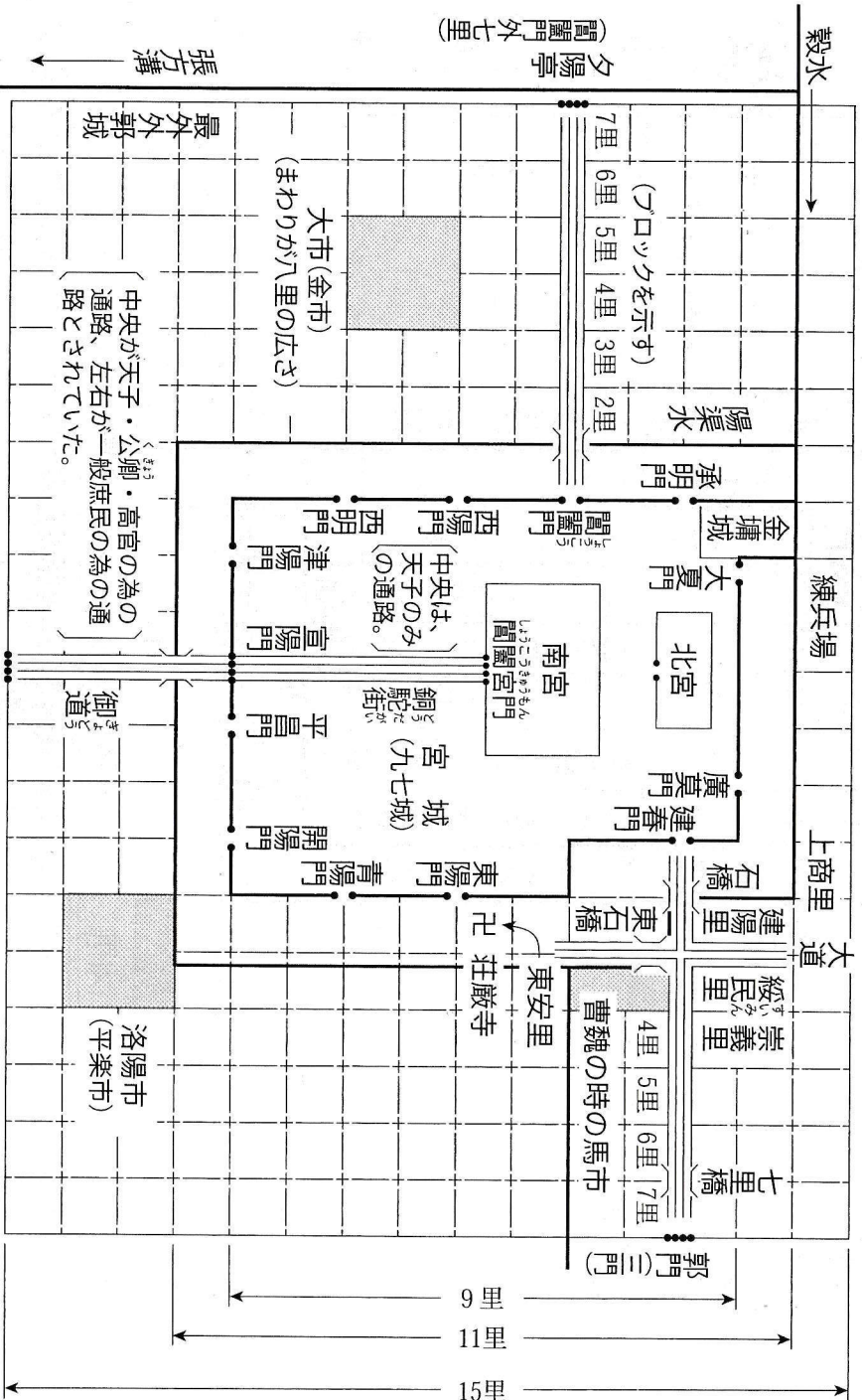
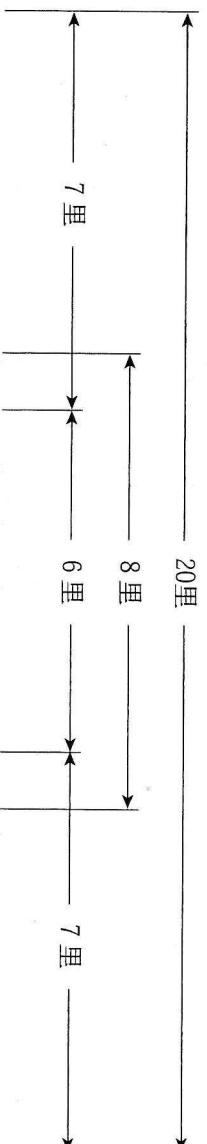


- [注]
- ① 宮城『九六城』には「十二の宮城門」が設けられていた。
 - ② 曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。
 - ③ 「宮城内に高官達の邸宅が並び、洛水の北側（宮城外）に市場を始めとする様々な施設があった」ということが、諸文献から分かる。
 - ④ 最外外郭城内に一般庶民が住んだのであろう。

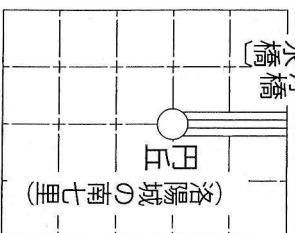


第10図 西晋洛陽城想像図

- [注] ①西晋時代 (265～316) に、『九六城』の東南部が拡張された。これ以降、洛陽宮城は『九七城』と称される。
- ②『晋書』卷四、惠帝本紀、永興元年 (304) 6月条に、「新作三城門」とある。新たに作った三城門とは、東陽門・青明門・建陽門のことであろうか。
- ③西晋代の建陽門が北魏代の開陽門である、という。 (「水経注」穀水条所載の『晋宮閣名』参照)
- ④『洛陽伽藍記』第四卷に、「閶闔門から城外へ出て七里のところに長分橋があった。中朝 (西晋) の時、穀水の氾濫を防ぐ為、石橋を作って流れを制御し、水かさが増すと分流して洛水へ注ぐようにした」とある。



洛水 (宮城の南四里)



伊水 (円丘の東をすぎる)

(9.7城)

第11図 北魏の洛陽区画想像図

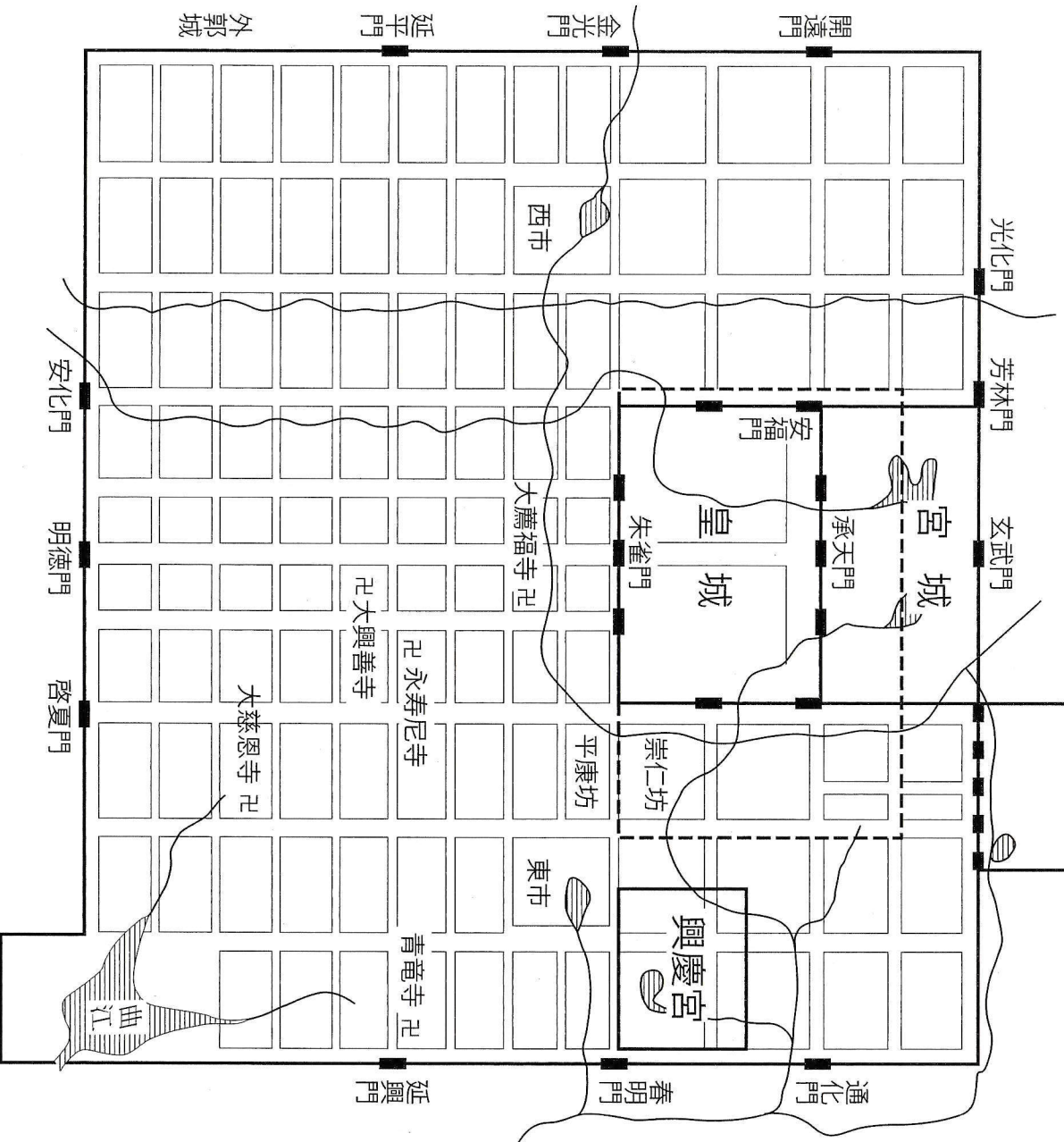
[注] ①曹魏・西晋代の宣陽門が、北魏代には元の平昌門の位置近傍へ移されて正門とされた、という。〔「水経注」穀水条〕

②宮城『九七城』には、「十三の宮城門」が設けられていた。

----- 現在の西安城

禁苑

大明宮



第27図 唐の長安城

『世界の歴史』(4) 唐とインド、塚本善隆、中央公論社、375頁。
『世界大百科事典』平凡社〈長安〉。他参照。

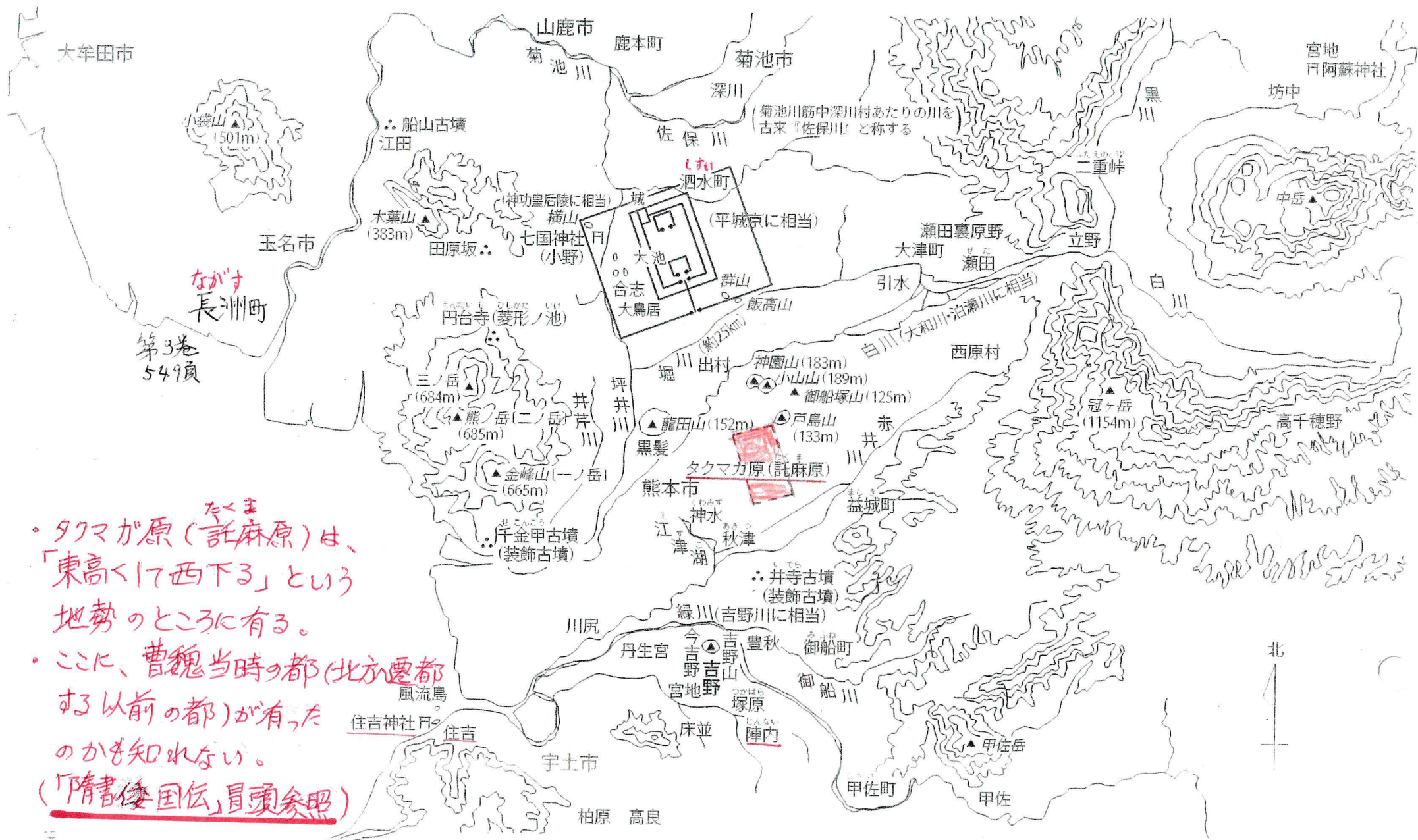
〔注〕① 外郭城城壁の内側に沿って、大道が回らされている。

② 宮城の南に、東西の市が置かれている。

③ 外郭城の各面ごとに〔外郭城の外方へ向かって打ち開く〕3門が配置されており、全部で12門がある。

④ 対面する門をつなぐ大道が多数ある。

⑤ 第5図「詩経」〔周礼〕の理想都市参照。（*かなり似ているように思われる）



- ・タクマガ原(託麻原)は、
「東高くして西下る」という
地勢のところに有る。
- ・ここに、曹魏当時の都(北方遷都
する以前の都)があった
のかも知れない。
(「隋書倭国伝」冒頭参照)

第12図 曹魏の洛陽城を模した「邪馬台国の都」想像図

〔注〕「白川中流域一帯に前方後円墳が無い」ということが注目される。

(第3巻) 1-(4/2)

0 2 4 6 8 10km

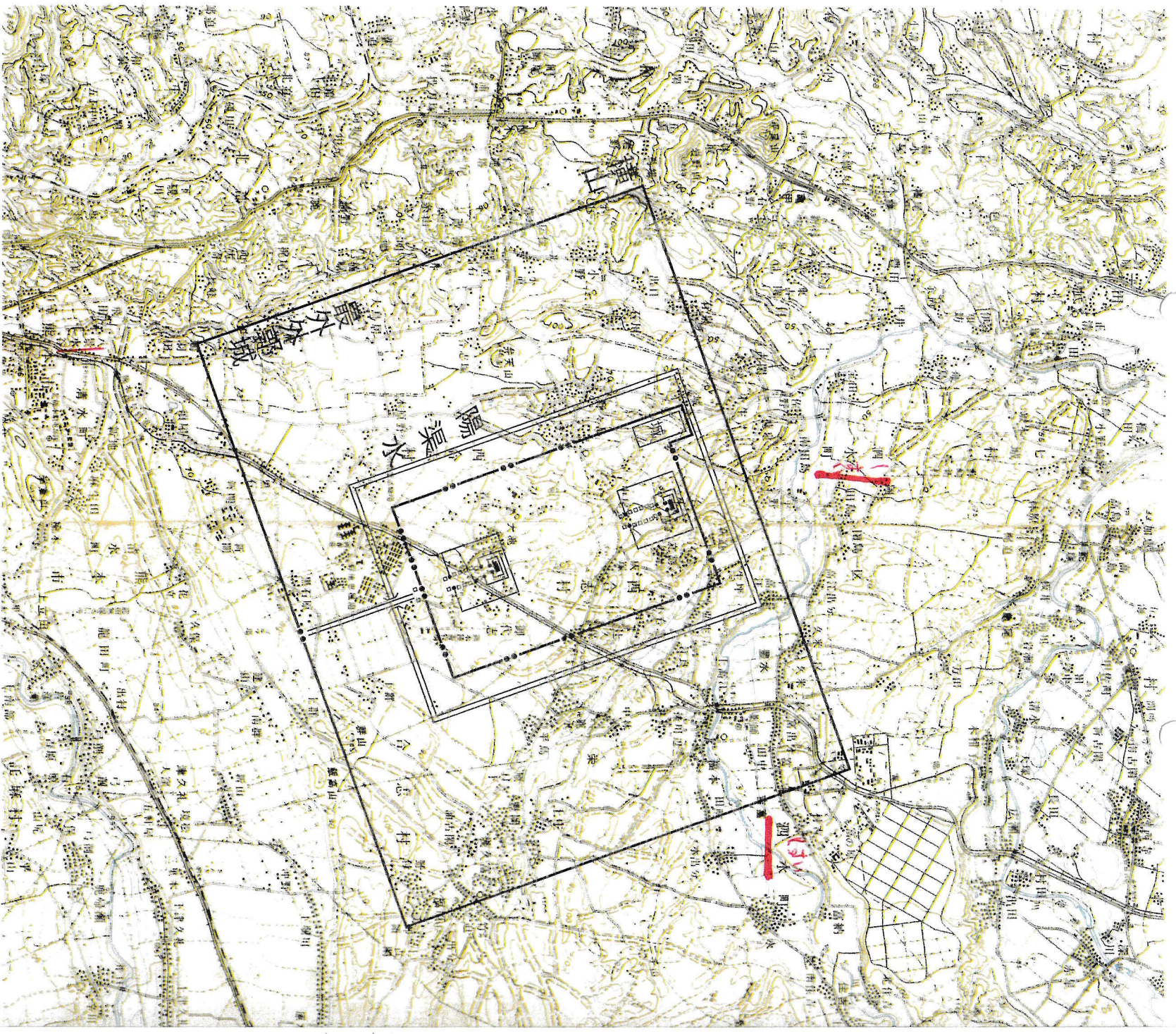


写真図版 8 肥後国鹿本郡大字円台寺の『菱形ノ池』

- 鹿本郡植木町役場 産業振興課課長 永田裕人氏提供。(平成21年3月撮影)
- ・小川の中(川幅を広げた浅い小川の中、左岸近く)に『菱形ノ池』がある。
 - ・上流から流れてくる土砂をくいとめる為の防護堤が、左(上流側)に設けられ

ている。

『神皇正統記』応神天皇条に、
「欽明天皇の御代、八幡神(応神天皇)が肥後国菱形池という所を始めてあらわれた。後、豊前国宇佐宮に鎮ま^り給^うた」と記されている。



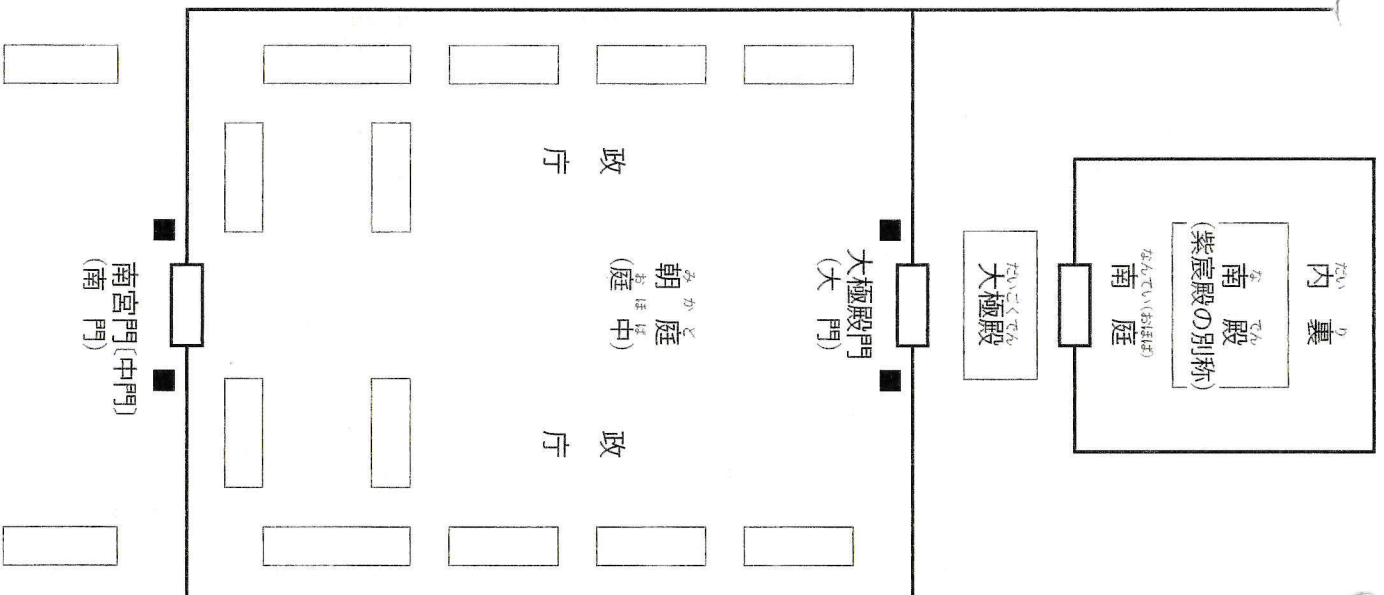
第13図 邪馬台国の「洛陽城」想像図

[注] ①曹魏代の宮城（九六城）の城壁には、「十二の宮城門」が設けられていた。また、曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。

②一方、『日本書紀』皇極天皇四年六月条には、「大極殿」や「十二の通門」の記載がある。

③合志原の『大池』『小池』について、「聖徳太子当国に《五ヶ所の池》を穿ち給ひし一なりといふ」と言い伝えられている。（「菊池郡誌」熊本県教育会菊池郡支会、名著出版、昭和48年1月発行、377頁〈大池小池〉参照）

※昭和42年6月30日付、国土地理院発行の5万分之1地図「高瀬」「隈府」参照。



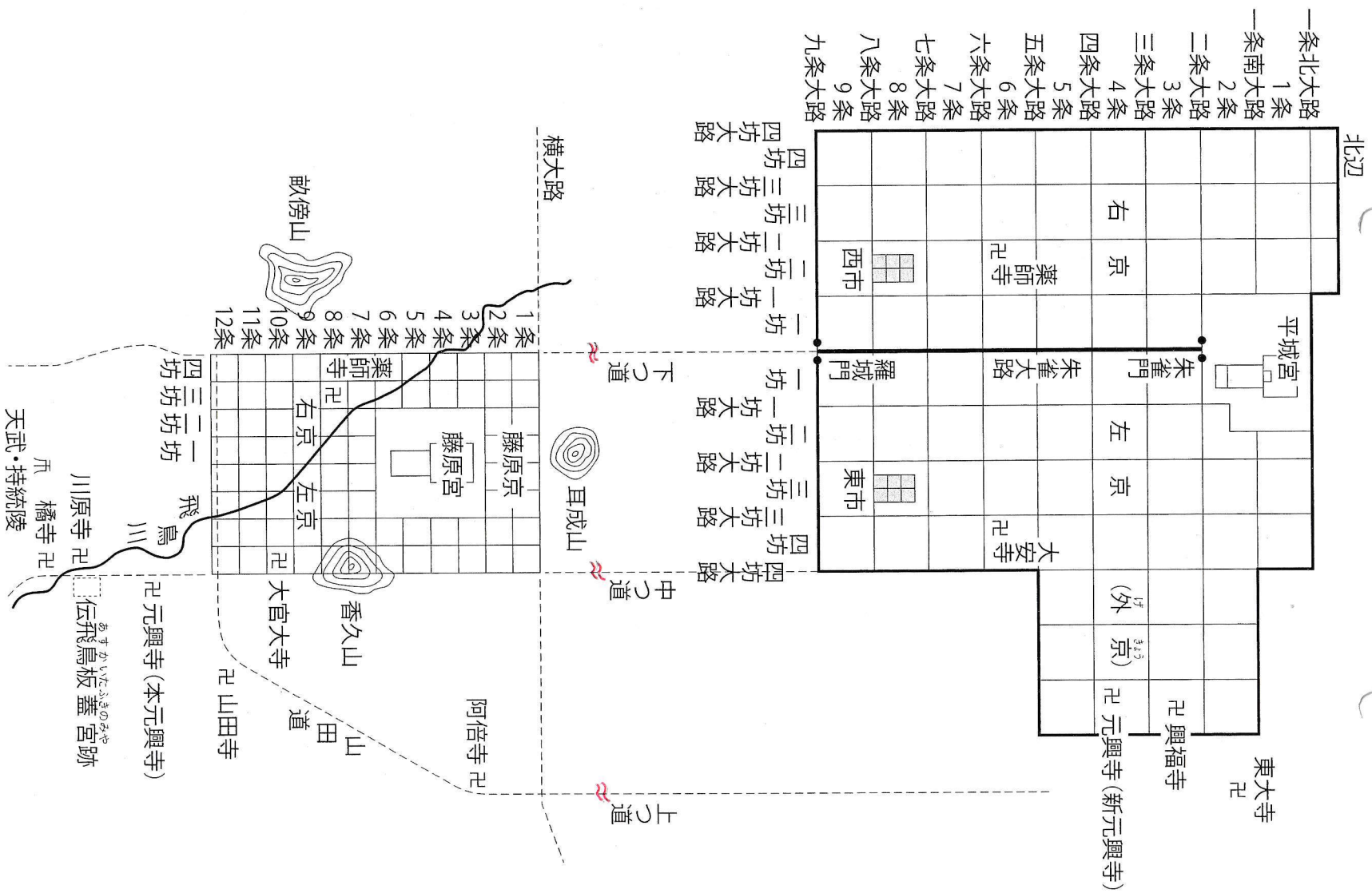
＊隋朝(581~619)の時代に、早くも日本の都城には、「朝堂院」が存在していたことを推測させる。

(第3巻) 3-(1/2)

第14図 推古朝の小墾田宮想像図

この本 415頁 (608)

- [注] ①推古紀16年8月条〈朝廷〉〈庭中〉〈大門〉。同18年10月条〈朝廷〉〈南門〉〈庭中〉〈廳(政庁)〉。同20年条是歲条〈南庭〔紫宸殿の前庭(広辞苑「南庭」)〕〉参照。
- ②「長安から平城へ」江上波夫編、平凡社、15～16頁(岸俊男氏執筆部分)参照。
- ③往古には、「南宮」の北方に「北宮」があったのだらう、と推察される。「南殿」「南庭」「南門」は、宮城内に「南宮」「北宮」の二宮があったことを示唆しているように思われる。
- ④朝堂院の南正門を、「中門」とも呼称するという。〔よみがえる平城京 坪井清足監修、日本放送出版協会、86頁参照〕
- ＊南北方向に並ぶ五つの正門のうち、真中に位置しているから「中門」とも呼ぶのであらう。



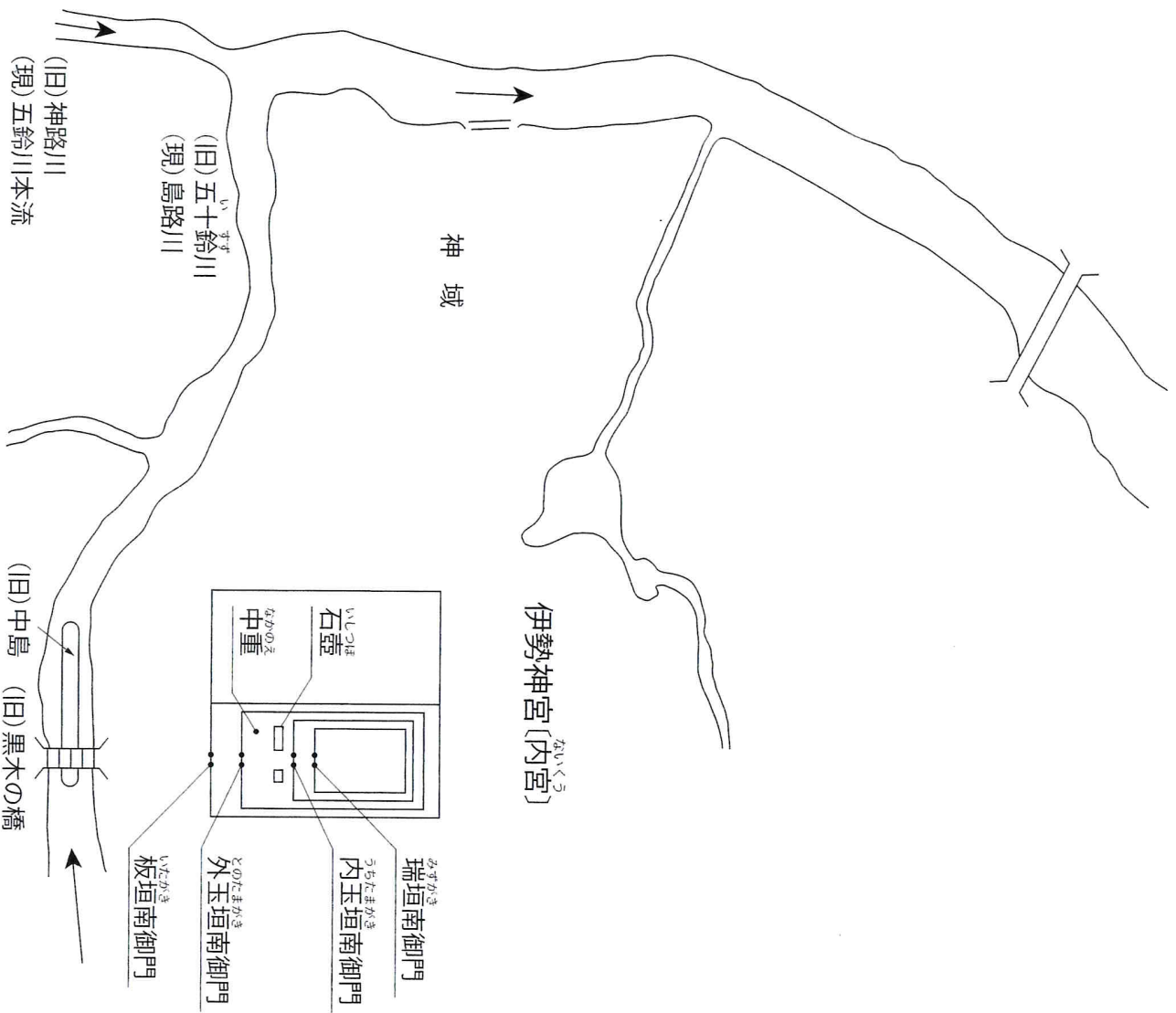
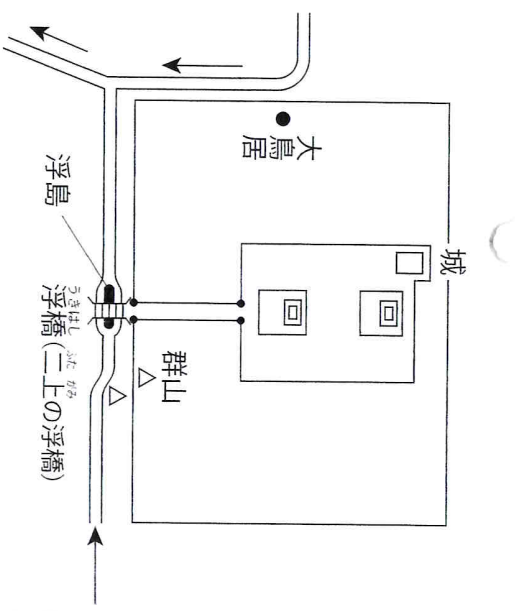
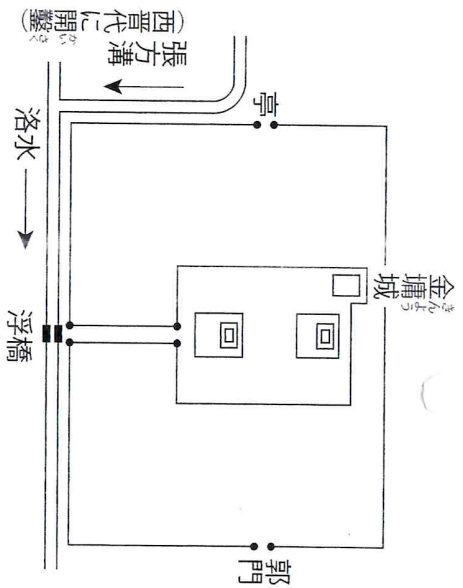
第26図 藤原京・平城京比較対照図

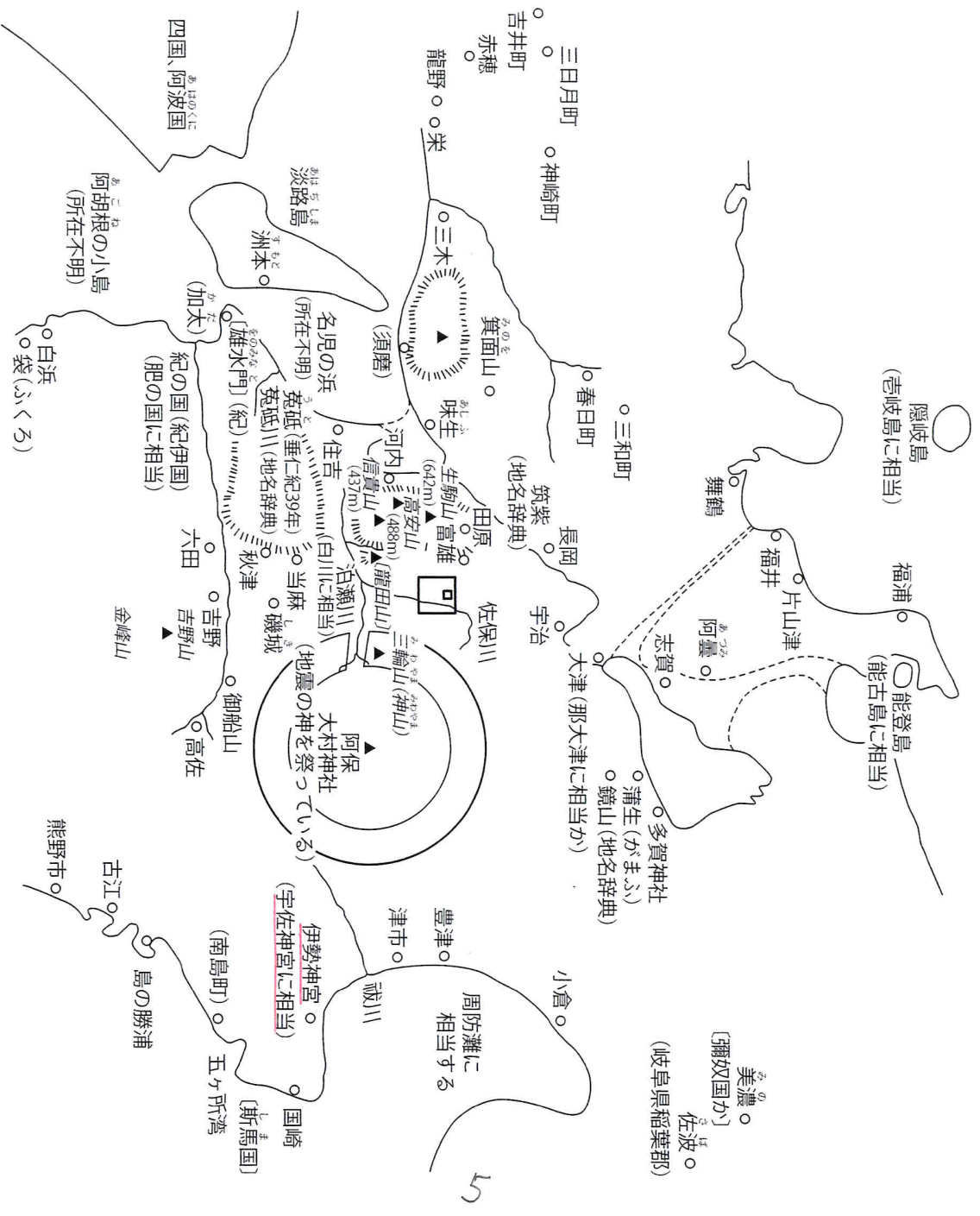
『長安から平城へ』江上波夫、平凡社、27頁。

『奈良の都』虎尾俊哉、講談社、89頁。

『世界の歴史』(4) 唐とインド、塚本善隆、中央公論社、375頁。他参照。

*朱雀門すざくもんは、[もと大伴門おほとももんなどと呼ばれていたが] 唐の長安城の皇城門こうじょうもん『朱雀門』すざくもんという名を踏襲した。〔「広辞苑」〈朱雀門〉。第27図参照〕





第18図 大和国を中心とする近畿の地図



写真図版 8 肥後国鹿本郡大字円台寺の『菱形ノ池』

鹿本郡植木町役場 産業振興課課長 永田裕人氏提供。(平成21年3月撮影)

・小川の中(川幅を広げた浅い小川の中、左岸近く)に『菱形ノ池』がある。

・上流から流れてくる土砂をくいとめる為の防護堤が、左(上流側)に設けられ

ている。

『神皇正統記』

応神天皇条に、

「欽明天皇の御代、

八幡神(応神天皇)が、

肥後国

菱形池

という所に始めて

あらわれた。後に、豊前国宇佐宮に鎮まらせた。」

と記されている。



写真図版10 聖徳太子像

『廣隆寺』 広隆寺発行 (平成6年の御贈進後に発行)、25頁参照。

- ・推古天皇11年11月1日、聖徳太子が秦河勝に仏像を授け、一寺を建立せしめられたのが広隆寺の開創であり、その当時の太子の御姿を上宮王院に祀っている。製作年代は、平安時代後期の元永3年(1120)である。
- ・この太子の尊像には古来、歴代天皇の黄檀染の御袍の御束帯(御即位の時着御される衣服、又は宮中の儀式の時お召しになる最高の儀服)が、即位後贈進され、各天皇御一代を通じて着用される御例である。
- ・毎年11月22日に1日だけ御開帳される。
- ・手前に、履物が揃えられている。

★『隋書』倭国伝に記されている「多利思北孤」は、聖徳太子(後の聖徳太子)のことであるとされている。(第10巻)第73章~第77章を讀んで下さい。

附錄

單傳太子，上原和，蒲設社，20頁，附花卷照。

わけにいかず、『日本書紀』以外の編纂者らは一切の記述を差し控えたのだろう。

(第3卷) 9

- ・右頁上半分は、
限度一杯は出し、
大きく掲載下さい。

・地名はヤヤ山さめの
明朝

・他は、大まなゴキに
17下さい。

・ 木、線にすゑ。(54頁)

・H-Sお願い
します。

12 QG

てくちよう おうぎかなめ
● 鞠智城が 扇の要に

見える

韃智城には、涼みヶ御所^{すずみ}があった、
 と伝えられている。(第11巻458頁～474頁)

・鞠智城は、鞠池城院ともいう。
(第13巻)323 他におり詳述。 中心よりかけ

14QG

第512図 神龍石分布図

『朝日新聞』昭和59年6月13日付 <7世紀築造説に“物証” 福岡・鹿毛馬、須恵器の破片が出土> 他参照 5
22
別巻766頁に同図 (第3巻) 10

